

研究ノート

## ボストン・ガードナー美術館の妙法蓮華

岡田 文 弘

### 一、問題の所在

筆者は二〇一九年九月より二〇二〇年三月までアメリカにて在外研究を行い、ハーバード大学ライシャワー日本研究所に客員研究員として在籍した。<sup>\*1</sup> 同大学では阿部龍一教授を受け入れ先として、秋学期開講の『法華経』講読セミナー-EASTD 260: *The Lotus Sutra: Texts, Narratives, and Translations* に Special Guest の肩書で参加し、これを中心として研修を行なった。

このハーバード大学を中心とする研修において、筆者はその地の利を活かし、ボストン市内の美術館において私的に視察を行なった。同大学から南東に約三キロの位置に、ボストンひいてはアメリカを代表する著名な美術館が二館、立ち並んでいる。ボストン美術館 MFA、そして本稿で取り上げるガードナー美術館 Isabella Stewart Gardner Museum である。

この両館はいずれも、優れた仏教美術・東洋美術の所蔵で知られている。例えばボストン美術館においては、同館を代表する傑作「普賢延命菩薩像」をはじめ、数多くの仏教美術・東洋美術が所蔵されている。一方、ガードナー美

術館においても少なからぬ数の重要な東洋美術品が展示されているが、その中でも注目すべきは、Votive Stele（奉納の碑）との作品名が付された仏像彫刻作品である。

この Votive Stele は、先の「普賢延命菩薩像」に比べると知名度は劣るものの、同時代の同趣の仏像の中でも最高傑作との評価も得ている（矢代「一九三四」五頁下―六頁上）。

更に、こと本宗にとって興味深いのは、同作が『法華経』に基づく仏教美術作品である点だろう。同作は表裏二面ともに彫刻がなされているのだが、その裏の側（背面）には、『法華経』虚空会の二仏並座像が彫刻されているのである。

そこで本稿では、このガードナー美術館所蔵 Votive Stele を取り上げ、同じく虚空会に取材する日蓮の曼荼羅本尊をも参照しながら、若干の考察を加えてみたい。

なお Votive Stele にかんする先行研究としては、Chavannes 「一九一四」、林保堯『法華造像の研究 イザベラ・スチュワート・ガードナー博物館蔵東魏武定元年石造釋迦像考』（筑波大学学位請求論文、一九九五年）などが主要なものとして挙げられよう。本稿においては、特に林「一九九五」の成果を援用しつつ、考察を進めたい。

## 二、ガードナー美術館、および Votive Stele について

ガードナー美術館 Isabella Stewart Gardner Museum は、イザベラ・スチュワート・ガードナー（一八四〇―一八二四）によって創設された。彼女はニューヨークに生まれ、一八六〇年に結婚しボストンに移住した。夫妻は一八七〇年以降、ヨーロッパやアジアを旅行する。一八九一年、貿易商・投資家であった父が他界し、一億六千万ドルの遺産を相続、その遺産で本格的に美術品蒐集に乗り出す。一八九九年に蒐集品の所蔵する美術館の建設に着工し、これがガードナー美術館となる（一九〇一年完成、一九〇三年開館）。展示品の配置は彼女自身のデザインによるもの

で、変更しないよう遺言している。<sup>※3</sup> なおくだんの Votive Stèle は一九一四年より所蔵されている。<sup>※4</sup>

このガードナー美術館において、Votive Stèle は一階の中国美術コーナーに展示されている。余談だが、順路の序盤に展示されていることから、来館者にも大きな印象を与えているだろうと推測される。以下、その概要について整理しておく。

Votive Stèle は、同像の台座の碑文によれば大魏（東魏）武定元（西暦五四三）年の製作である。表面に釈迦像（脇士を従える）、そして背面に『法華経』虚空会の二仏並座像が彫刻されている（図1・2参照）。

なお、このように釈迦像と『法華経』二仏並座像を表裏に彫刻するという形式は、この時代に盛んに造られていたそうである。先行研究によれば、中国六朝時代においては「二佛並坐像は、釋迦を本尊となすところの佛像の光背、特に屢々その背面に刻出されるのが、最も普通」（矢代「一九三四」四頁下）とのことである。また、前節でも少しく触れたが「光背背面に於ける二佛並坐像の刻出は、六朝時代に頻繁に行はれたが……ボストン市故ガードナー夫人蒐集、東魏武定元年の釋迦石像（筆者注：Votive Stèle）の背面に……最も人情的に行き届きたる二佛の會話し交感する場面を描出して居るのは、此種の最高傑作の一と言はねばならぬ」（矢代「一九三四」五頁下―六頁上）とも言われている。

ではここで改めて、Votive Stèle の彫像について、より仔細に見ておく。

まず表面の釈迦像（図1）だが、四者の脇士を従えている。内から摩訶迦葉・阿難の伝統仏教における二尊者、そしてその外に文殊（外右、欠損）と弥勒（外左）の大乗仏教における二菩薩が彫刻されている（ただし欠損の文殊像については観音像も出されている。<sup>※5</sup>）

一方、背面の『法華経』虚空会二仏並座の像（図2）は、まず上段に釈迦・多宝の二仏が並び、その間に大きな蓮華が彫刻されている。そして二仏の両脇に、菩薩二体が配されている。更に二仏並坐の下部には六人の比丘、その下



図1…ガードナー美術館所蔵 Votive Stone 表面（二〇一九年九月十三日、筆者撮影）

に二体の獅子が配置されている。



図2…ガードナー美術館所蔵 Votive Stone 背面（二〇一九年九月十三日、筆者撮影）

### 三、背面の『法華経』虚空会二仏並座図について（日蓮本尊との比較）

前節で述べたように Votive Stèle は両面の彫像であるが、本稿で特に考察したいのは、背面の『法華経』虚空会の二仏並座像（図2）である。ここで比較対象としたいのが、同様に『法華経』虚空会に基づいて図顕された日蓮の曼荼羅本尊<sup>※7</sup>である。

言うまでもなく、中国東魏時代の仏像と日蓮の曼荼羅とは、成立の場所も時代も大きく異なっており、直接の影響関係は即座には認めがたい。従って比較対象としての是非はあろうが、一部見るべき問題もあるので、一試論として以下に考察するものである<sup>※8</sup>。

日蓮の曼荼羅本尊の特性とは、①本門に基づく②中尊に題目を配置する、という二点が挙げられよう。これら①②の特性について、まず確認しておく。

先にも述べたように日蓮の曼荼羅本尊は、Votive Stèle 背面と同様、虚空会に基づく図像となっているが、①虚空会の中でも特に本門に基づくと明示されている点<sup>※9</sup>が、その大きな特徴となっている。

虚空会においては、二仏並座の形態は見宝塔品第十一でとられるものの、その後、本門に至ると従地涌出品第十五から囑累品第二十二までの八品において、更に地涌菩薩が脇士としてそこに列なる。日蓮はこの本門八品に基づく本尊を図顕せんとしたのであり、したがってその曼荼羅中には、八品限定の脇士である地涌菩薩（の上首たる上行・無辺行・浄行・安立行の四菩薩）が勧請されている。

この「四菩薩を脇士とする」という点をこそ日蓮は、自身の本尊の Identity と捉えていたのであり、『観心本尊抄』において「月支震旦には未だ此の本尊まします。日本国には……伝教大師は粗ほ法華経の実義を顕示す。然りと雖も時未だ来らざるが故に東方の鵝王を建立して、本門の四菩薩を顕さず」（月支震旦未有此本尊。日本国……伝教大

師粗顯示法華經実義。雖然時未來之故建立東方鵝王、不顯本門四菩薩」定遺七二〇頁）と述べ、インド・中国はもとより、日本の伝教大師最澄ですら造立しなかつた本尊形式として誇っているのである。<sup>※10</sup>なお、この四菩薩の脇士をより強調したものが、いわゆる「一尊四士」の本尊形態となるのも周知の通りである。

この四菩薩の勧請と並び、もう一点、日蓮の曼荼羅本尊の特徴として挙げるべきが、②中尊として南無妙法蓮華經の題目が置かれる点である。この構図は『観心本尊抄』にも「塔中妙法蓮華經、左右釈迦牟尼仏多宝仏」（定遺七一―二頁）と指示されている通りであり、更には初期の段階から温められていた図案でもある（第一に本尊は法華經八卷・一巻一品・或は題目を書いて本尊と可定……又たへたらん人は釈迦如来・多宝仏を書いても造ても法華經の左右に可奉立之。『唱法華題目鈔』定遺二〇二頁）。

以下、これら二点の日蓮曼荼羅本尊の特性について、Votive Stèle背面との比較を試みたい。

まず①本門に基づき、つまり地涌の四菩薩を脇士として表す日蓮曼荼羅に対し、Votive Stèle背面の構図で従者となっているのは、二仏の下部に表された六人の比丘、および二仏の両脇に表された二菩薩である。

まず六比丘だが、一見、地涌菩薩の表現のようにも見える。しかし人数も六という半端な数であり、しかも地涌菩薩の外見的特徴であるところの三十二相<sup>※11</sup>を具足していない。<sup>※12</sup>

また両脇の二菩薩像についても、観音菩薩像と既に特定されている（林「一九九五」参照<sup>※13</sup>）。

以上、Votive Stèle背面には地涌の四菩薩のモチーフは見られず、この点においては、日蓮曼荼羅との関連は見出せない。

続いて②釈迦多宝二仏の間に題目を中尊として置く、という日蓮曼荼羅の特徴だが、Votive Stèle背面では釈迦多宝二仏の間に大きな蓮華の像を造っている点が注目される。

この大蓮華について、Votive Stèleの体系的な研究である林「一九九五」は、本像の中心となるモチーフとして極め

て重要視しており、詳細な考察を加えている（二五七九―一五九〇頁等<sup>※14</sup>）。その肝要となる部分を引用する。

「この宝華は……いつそう注意すべき点は、その位置が特に二仏の間にあることのほか、下側台座を含めずに、この石像背面の図像全体の上、下、左、右のちょうど真ん中にあることである……図像全体の表現において、構成全体の中心を象徴する意識的な製作物としたということが分かる。従って、この大宝蓮華は、特別な意味を持った思想的表現であるべきである。……大宝蓮華は、世尊の「説法華経」と「滅後嘱経」との二重の性質を意識的に兼ね備えた、象徴的な仏法の華なのである」（林「一九九五」一五七九―一五八一頁）

このように林氏はくだんの大蓮華が、ここで説かれ付嘱される『法華経』を象徴するモチーフとして製作されている、との分析を行なっている。

「大蓮華という『法華経』のシンボルとみなせるモチーフを、釈迦多宝二仏の間に置き、図像の中心とする」というこの Votive Stele 背面の構成は、「題目という『法華経』を表象する一種のロゴタイプを、釈迦多宝二仏の間に置き、本尊の中尊とする」という日蓮の曼荼羅と、発想が近似しているといえよう。

なお付言すれば、Votive Stele 背面に配された大蓮華も、日蓮曼荼羅に配された題目も、『法華経』の記述における虚空会の描写には登場しないモチーフである。両者とも、それぞれの図像作者が『法華経』の紙背を深く読解した結果、独創の解釈の上に配したものであり、その結果としての近似といえる。

前述したように、中国東魏時代の仏像と、日蓮本尊との間に影響関係は直ちには認められない。しかし、卓越の『法華経』理解と、優れたデザインの感性をあわせ持つ人物が、同種の表現に至ったことには必然性を見てもよいのではなからうか。



## 四、まとめ

以上、本稿では、ガードナー美術館所蔵の仏教彫刻像 Votive Stèle（特に、背面の二仏並座像）について、日蓮の曼荼羅本尊をも参照しながら、その性質について考察を試みた。

その結果、釈迦・多宝の二仏の間にそれぞれ「大蓮華」「題目」という、『法華経』一経（およびその付嘱）を視覚的に表象する一種のロゴタイプを置いている点での近似性を指摘した。成立の時代も場所も大きく開きのある両者には、直接的な影響関係は恐らく認められないものの、それぞれの図像作者（『法華経』の優れた理解者）が『法華経』の紙背を深く読解した結果、ある種必然的に至ったデザインとして、これを見なすことができよう。

（テキスト）

立正大学宗学研究所『昭和定本 日蓮聖人遺文』（身延山久遠寺、一九五二―一九五九）↓定遺

（参考文献）

Edouard Chavannes [一九一四]『Six Monuments of Chinese Sculpture』Ars Asiatica (Hachette Livre) 242, 110―118年復刊版を参照)

Eugene Yuejin Wang [二〇〇二]『Votive Stèle』Alan Chong編『Masterpieces from the Isabella Stewart Gardner Museum』ISGM and Beacon Press 一八〇―一八二頁

浅井円道 [一九七四]『本尊論の展開』『中世法華仏教の展開 法華経研究』二五一―二七六頁

水上文義 [二〇〇〇]『日本撰述偽託書に見る法華経曼荼羅の構成 蓮華三昧経を中心に』『印度學佛教學研究』四九（一）、

矢代幸雄「一九三四」『太和十三年造金銅釈迦多宝二仏並坐像』『美術研究』三三三、一一九頁

林保堯「一九九五」『法華造像の研究 イザベラ・スチュワート・ガードナー博物館蔵東魏武定元年石造釋迦像考』筑波大学

※1 この留学に際しては、宗門の派遣研究員制度による多大なご支援をいただいた。この場をおかりして、宗門関係者の皆様、そして同制度を支えてくださった武見敬三先生に、深く感謝の意を表させていただきます。

※2 なお筆者は、前述したESTD260の二〇一九年十月三〇日におけるセミナーで、『法華経』見宝塔品に関するレクチャーを行なった。その内容は、二仏並座を題材とする仏像製作の歴史において、日蓮本尊の特異性について述べたものである（趣旨は、日蓮は虚空会の世界を本尊に図顕するにあたり、宝塔品でなく本門八品を注視し、四菩薩を脇士とする形式を樹立したことによって、『法華経』図像の歴史において独自の本尊を作り得た、というもの）。このレクチャーと本稿は、二仏並座仏像と日蓮本尊の関係を考究する点で、いわば姉妹編となっていることを付言しておきたい。

※3 以上、ガードナー夫人およびその美術館の概要については同館公式サイト掲載 (<https://www.gardnermuseum.org/visit/gallery-resources> 二〇二〇年十二月九日閲覧) の「イザベラ・スチュワート・ガードナーと彼女の美術館について」(<https://www.gardnermuseum.org/sites/default/files/uploads/files/Museum-Overview-Japanese.pdf>) を参考にした。

※4 Wang [二〇〇二] 一八〇頁

※5 Wang [二〇〇二] 一八〇頁

※6 林「一九九五」一一一—一三頁

※7 佐渡始頭本尊（一二七三年）以降の、十界勧請の所謂「大曼荼羅」を対象とする。

※8 なお、表面の釈迦像についても、四者の脇士を持つという点で一尊四士を彷彿とさせる。しかしこれについては更なる

考究が別途必要となろう。

※9 「如是本尊在世五十余年無之。八年之間但限八品。」（『観心本尊抄』定遺七二二頁）

※10 ただし『蓮華三昧経』には地涌の四菩薩を従えた久遠仏を中尊とする法華曼荼羅が説示されており、その更なる典拠は伝・書写山性空『書写山真言書』とされている（水上「二〇〇〇」一七一頁下）。なお浅井「一九七四」二六六―二六八頁は、同経の他に『大日経疏』をも、地涌の四菩薩を脇士とする法華曼荼羅を示した先駆例として挙げている。しかし筆者の管見の限りでは、『大日経疏』の当該記述は曼荼羅の構図を説示したもので無いように見受けられる。

※11 「是諸菩薩身皆金色、三十二相無量光明」（大正九、四〇上一―二）

※12 なお林「一九九五」はこの六比丘を分身仏の侍者と推定している（一五七七―一五七八頁）。

※13 「二仏並座像の左右に現れた、宝冠をつけ、菩薩の装いをした……二図像人物は、七宝塔中で、世尊が宣揚する入滅後の嘱経を受けた弘経大士を意味している……そして、図像が表現した二弘経大士と……この石像銘の題記、即ち「観世音二像主王舍龍」とを参照してみると……「観音」大士像主であることが分かる」（一六三四―一六三五頁）。その詳細な検討については、以下に続く一六三六―一六四三頁参照。なお、このように観音像を二体制作するという作例は往々にして見られるとのことで、林「一九九五」一六四四―一六六三頁参照。

一方Wang「二〇〇三」は、この二菩薩像を菩薩に廻心した声聞としており（一八二頁）、この説についても検討が必要であろう。しかし、いずれにせよ地涌菩薩とは見なされていない。

※14 本像の大蓮華の意義については、類似の作例の有無等を調査する余地があるものの、この林氏の研究によって、その重要性はひとまず十分に立証されているといえよう。